

たすくかわら版

学級によりよい雰囲気をつくる

教師の行動・言葉かけ



「たすく」…古語では「助く」
英語では「task」

手助けし、支える。後見する。
仕事。

はじめに

たすくかわら版の「たすく」とは、古語では「助く：手助けし、支える」という意味であり、英語では「task：仕事」の意味です。子どもたちの成長を手助けし、支える、先生方の指導・支援を紹介し、先生方のお仕事の一助となることを願って、『たすくかわら版』という名前にしました。このたすくかわら版では、日々現場でがんばっておられる先生方の日常的な指導・支援を取り上げまとめています。

このような日常のちょっとした指導を取り上げようと思ったのは、若手教員が増加する中で、経験の少ない先生方の学級経営の悩みを少しでも解消できればという思いからです。教師と子どもとの人間関係や、子ども同士の人間関係づくりがうまくいかず、悩んでいる若手教員がおられると聞きます。校内研究や研究発表会などで、1時間の授業を見る機会はたくさん得ることができますが、日常の指導の仕方について、他の先生方の様子を見る機会は意外に少ないかもしれません。また、学級経営について系統的に学べる研修が少ないという報告もあります。

職員室で、子どもの様子などを先輩の先生方と雑談を交えながら話をするという機会も減ってきているという声も聞かれます。様々な教育課題が山積し、日々対応に追われる毎日では、ゆとりをもって会話する時間をもつことが難しい状況になってきています。そのような状況にあっても「子どもの成長を支えたい」と思い、子どもたちとともに日々奮闘されている先生方の助けになればと、先輩の先生方のすばらしい指導や支援についてまとめようと思いました。

また、少し元気をなくしてしまっている先生方に、この「たすくかわら版」を届けたいという思いもあります。一生懸命頑張っているのに、うまくいかないことは数多くあります。成果が上

らなければ、「自分はダメだ」と、教師としての存在を否定してしまうこともあります。でも、結果ばかりに目をとられず、日々懸命に子どもたちに向き合って、悩み、考え、子どもの成長を支えようとしている御自身の姿に目を向けてほしいのです。今までの実践を振り返れば、この「たすくかわら版」で挙げたような素晴らしい実践をたくさん行っておられるはずです。ちょっとしたことだけれども、とても大切な子どもとの関わりです。

大きな成果ばかりに目を向けていたら、「たすくかわら版」で挙げたような実践の良さを見過ごしてしまいます。至らないところだけではなく、自分自身の良さにも目を向けてほしいと思います。自分の良さを感じられるからこそ、自分の至らない点も正しく受けとめることができ、成長していけるのではないのでしょうか。そして、自信をもって子どもたちの前に立ってほしいと思います。

先生方の日々の実践の積み重ねが、大きな成果へとつながっていくことを願っています。

本冊子は、以下の四つの章で構成しています。

「子どもたちと楽しい学習をつくろう」・・・・・・・・・・『動』

「子どもたちが学習できる環境を整えよう」・・・・・・・・・・『静』

「子どもの思いを受けとめ、温かく語りかけよう」・・・・・・・・『柔』

「子どもの様子を見取り、落ち着いて語りかけよう」・・・・『悠』

教師が大切にしたい視点を『動』『静』『柔』『悠』の四つにまとめました。『動』教師のちょっとしたユーモアが子どもたちと楽しい学習をつくり、『静』教師のちょっとした心配りが子どもたちの落ち着いた学習環境を整えます。『柔』教師の温かい言葉かけが子どもの心を開き、『悠』教師の落ち着いた語りかけが子どもの成長をうながします。

『動』『静』『柔』『悠』の四つの視点を大切に、子どもたちと関わり、学習をつくっていくことが大切ではないかと考えています。

目次

動

子どもたちと楽しい学習をつくろう

1. 「10秒しか見せへんで。」 1
2. 「はい、ストップ。一時停止。」 3
3. 「リボンってどこで売っているか知らない？」 5
4. 「配給っていうのは・・・。」 7

静

子どもたちが学習できる環境を整えよう

5. 声をそろえて出して、学習の意欲を高めよう 9
6. 漢字の空書きは何のために？ 11
7. 子どもの集中するときってどのようなとき？ 13
8. 「隣同士で話し合ってみよう。」 15
9. 明るい運動場は子どもの心を明るくする！ 17
10. いつも片付いているってすっきりしますね。 19
11. 「きちんと整理整頓しなさい。」というけれども・・・ 21



子どもたちの力を引き出す、何気ない指導・支援を集めてみました。

柔

子どもの思いを受けとめ、温かく語りかけよう

- 1 2. 職員室から子どもたちを眺める謎の姿 23
- 1 3. 「同じでもいいですよ。」 25
- 1 4. 「まず、そこから来ましたか。」 27
- 1 5. 「先生の真似をしてね。」 29
- 1 6. 「先生、うれしい。」 31
- 1 7. 「どう間違っただってというのが勉強なんだよ。」 33
- 1 8. ほめる言葉を豊富にもつ 35
- 1 9. 発表しやすい雰囲気をつくるために—教師の受けとめ方— . . . 37

悠

子どもの様子を見取り、落ち着いて語りかけよう

- 2 0. 「名前は大切なんだよ。」 39
- 2 1. 「先生の言いたいことが本当にわかるの？」 41
- 2 2. 「毎年バージョンアップしていきます。」 43
- 2 3. 挙手して発言できるようにするためには 45
- 2 4. パートナーシップからの発言 47
- 2 5. 子どもの成長を願う強い思いに満ちた目で 49

「10秒しか見せへんで。」

「何で10秒なん？もっと見せてくれてもいいやん。」そんな声が聞こえてきそうです。でも、この制約が子どもの集中力を生みます。

▶話したり、説明したり、資料に集中させたいときには、子どもの意識を教師に向けさせる必要があります。

算数の時間です。立体の体積を求める学習をしてきました。今まで使ってきた単位はcmでした。ところがこの時間から使用する単位はmです。単位がcmからmに変わっていることを子どもたちに印象付けたいところです。そこで先生は、見せたい資料を裏向けに子どもたちに見せ、このように話し始めました。

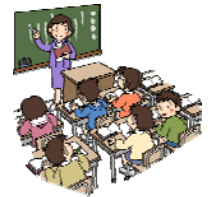
「今から（手に持っている）この紙を10秒だけ見せるから、今までと何が違うか見つけてください。」

この語りかけで、子どもたちの視線が先生に集まりました。そして、「10秒しか見られない」という制約が意識をより集中させます。このような状態になったところで、「いくよ。10秒しか見せへんで。3，2，1，はい。（資料を見せる。）」

「・・・わかった。mになってる！」

真剣なまなざしで資料に集中する子どもたちの姿がありました。

普通に見せるのと、もったいぶって見せるのでは、子どもの集中の度合いが違います。ちょっとしたことで子どもを惹き付けることができるというよいお手本だなと思いました。このような「ちょっとした工夫」が日々の授業では大切です。ちょっとしたことから、毎日続けることができるのだと思います。



◎子どもの意識を惹き付ける「ちょっとした工夫」

- ・資料を見せる前に、「じゃじゃん」など、口で言う。
- ・手紙などの資料は、すぐには見せない。先生が一人で黙読するふりをする。
→子どもたちの「見たい」という思いをくすぐる。それから、みんなに見えるサイズのものを掲示する。
- ・わざと速く見せる。
→「見えない。」という子どもの声が出たらしめたもの。「もう一回だけだよ。」
と言ってゆっくりと見せる。 などなど
本当に「ちょっとした工夫やな。」という声が聞こえてきそうです…。でも、案外効果があります。ちょっと照れてしまいそうなものもありますが、先生がこうしたユーモアを見せることは、意識を惹き付けるだけでなく、学級の中で温かい雰囲気をつくっていくことにつながっていくのではないのでしょうか。



「はい，ストップ。一時停止。」

この言葉を聞いて、ビデオの一時停止のよう
に止まってくれる子ども。教師と子どもの
こんなやり取りがあったら楽しいですね。

▶ 学習にユーモアを。ちょっとしたユーモアが子どもの心を和ませます。

算数の時間。面積を求める学習でした。少し違った解き方を取り上げ、子どもに説明してもらい、ユーモア交えながら解き方のポイントを示されていました。

C: (子どもが前に出て説明する)

「(黒板を指差しながら) 4×4 というのは、全体の面積で・・・。」

T: 「はい、ピッ。一時停止。一時停止やで。」

C: (ビデオの一時停止のように子どもが止まる。)

T: 「 4×4 というのは、全体のここが 4×4 なんだって。はい、再生。」

C: 「 2×2 っていうのが、ここの面積 (欠けている部分) の面積です。」

T: 「はい、ストップ。一時停止。 2×2 っていうのは、(板書を指差しながら) この部分のことだそうです。はい、再生。」

(聞いている子どもたちの笑い声)

C: 「で、ここのやつ (全体) からここのやつ (欠けている部分) を引いて、ここの (求める部分) の面積を求めました。」

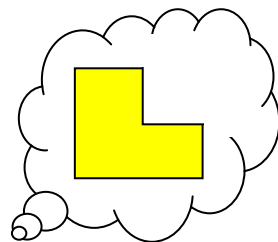
T: 「ということです。意味わかりましたか。」

(聞いている子どもたちのつぶやき) 「うわっ、すげえ。」

T: 「はい、では、早送り。」

C: (急いで席に戻る。)

(聞いている子どもたちの笑い声)



子どもと先生の息がぴったりと合った、とても楽しい一場面でした。ちょっとしたユーモアを入れることで、子どもたちの表情も明るくなり、聞こうとする意欲も増したように思います。何より先生の楽しそうな表情が子どもたちにも伝わり、学級が温かい雰囲気にも包まれたような感じがしました。子どもたちの心を和ませる、ちょっとしたユーモアを忘れずに授業を進めていきたいですね。

「すぐれた授業の創り方入門」という本に 14 のすぐれた授業のポイントが述べられています。そのポイントの一つに「授業全体にゆとり (ユーモア) がある」ということが挙げられていました。子どもたちにしっかりと力を付けていくために、「ゆとり (これはユーモアともいえる) をもって、子どもの理解のスピードに合わせて『これだけは』という基礎基本を教える」ことが大切であると述べられていました。

(参考文献: 有田和正『すぐれた授業の創り方入門～名人たちの授業に学ぶ～』教育出版)



「リボンってどこで 売っているか知らない？」

「リボンかあ。リボンはおそこに売っているかもしれないなあ・・・って先生、今算数でしょ。何の関係があるの。」
こんな子どもの心の声が聞こえてきそうです。

▶ 何気ない世間話が、案外子どもの関心を惹いたりします。

「これから算数の学習を始めます。」

「お願いします。」

いつものように算数の時間が始まりました。今日から新しい単元です。先生から新しい単元の説明があると思いきや…。

「この中で…。いるかな。リボンを売っている場所を知っている人？」

「う～ん」

「リボンってどこで売っているか知らない？この辺で。〇〇（ショッピングセンター）とか売ってないかな？知らんかな？」

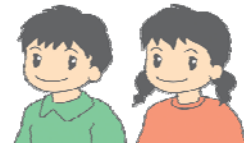
「〇〇か。どうかな。（つぶやき）」

「今日は、このリボンのお話なんです。このリボン1m。（紙で作ったリボンを掲示する）1mで値段が80円。」

「高い！」

「1mで80円なんです。」

「リボンってそんなにする!？」



この導入の何気ない世間話のような話、いいですね。いきなり本題に入っても、気分が乗らないので、子どもの興味を惹いてからにしようと、身近な話から導入に入ることがあります。算数を苦手だと思っている子どもたちにとってみれば、自分の知っている話題が出てくる方がずっと学習に入りやすくなるはずです。実際、「〇〇」という名前を聞いたときに、表情が和らぐ子どもが多くいました。少しでも、子どもたちの学習に対する意欲を喚起できるような導入を心がけたいですね。

《子どもの身近な話から授業を始めることで…》

身近な話題を取り上げることで、「学習に対する抵抗感を少なくしたり、学習への意欲を高めたりする」ということに加え、「知っていることと関連させることにより、学習効果を高める」という効果があります。

人は、知識を獲得するとき、バラバラに覚えていくのではなく、様々な情報と関連させて構造化して獲得していきます。何十とある羅列された言葉を短時間に記憶することができる人がいます。この人たちは、羅列された言葉を使って、物語をつくり、一つ一つの言葉を関連させることで、短時間で覚えることができるそうです。知識の獲得の仕組みをよく理解した覚え方と言えます。

子どもたちの学習でも同じで、子どもが知っていることと関連させて教えることは、記憶に留めたり、理解を助けたりする上で重要になります。学習につながる世間話をどんどんしていけたらいいですね。



(参考文献：山岸明子『発達をうながす教育心理学』新曜社)

「配給ってというのは…。」

子どもたちに言葉の意味の説明を求められたとき、どのような対応をしますか。

▶教師の対応の仕方、子どもの「能動的な態度」を育てることができます。

国語の時間。「一つの花」の時代背景を考える授業でした。



- 先生 「おやつどころじゃないってどういうことですか？」
子ども 「おやつがないからご飯を食べる。」
先生 「じゃあ、ご飯はあったのかな？」
子ども 「(ご飯はあったと思うけど) おやつがあっても食べる暇がない。」
先生 「食べる暇がなかったから？」
子ども 「おやつだけじゃなくて他のものもない。」
先生 「他のものもない。いろいろ不足しているってことは(教科書の)どこでわかるの？」

と、こういうやり取りを繰り返しながら、この時代の様子について考えを深める場面がありました。その中で、「配給」という言葉が出てきたときに…

- 先生 「お米の代わりに、配給される… 配給ってというのは…。」(辞書を開く)
子ども 「調べて調べて。」(数を数え始める)
先生 (急いで調べる)
子どもたち 「はやー」
先生 「配給… 割り当てて配ること。」
子ども 「ある物をみんなに分けるってことか。」



ぼくも辞書を使っ
てみようかな。

この子どもたちと先生とのやり取りの中で、子どもの「能動的な態度を育てる」ためのポイントが二つあったと思います。一つは、子どもの発言への「切り返し」、もう一つは「モデリング」です。

「切り返し」が、より納得する答えを見つけようとする意欲を引き出していました。教師が答えを与えるのではなく、子どもの発言に対して切り返して、子どもの発言を引き出していくことで、子どもたちは思考をめぐらせ、考えを深めていくことができていたと思います。

また、先生が辞書を使って調べる姿が、子どもたちによいモデルになっていたのではないかと思います。辞書を使って調べるということは、なかなか子どもたちに定着しにくいことですが、まずは、教師が望ましい姿を示していくことが大切だと感じました。

「モデリング」といえば、子どもたちの話し方や注意の仕方などを見てみると、担任の先生によく似ていることがあります。話している内容だけでなく、その伝達の仕方まで、知らず知らずのうちに学習しているようです。自分の経験から言うと、モデリングして欲しくないときほど、しっかりと学習してしまっていることがよくあります。



声をそろえて出して、
学習への意欲を高めよう。

「みんなで声をそろえて、その場に合った
声を出す」言うのは簡単ですが、なかなか難
しいものです。

▶ 「声をそろえて出すこと」の意義について、考えてみました。

授業の導入で、しっかりと前時のおさらいをして、さあ、今日の本題へ。
「今日はこんな形（いくつかの形を示す）、このような形を正多角形といいます。この正多角形について調べましょう。では、今日の学習のめあてを書きましょう。」

『正多角形は、対称な図形なのかを調べよう』

先生が板書するとともに、子どもたちがノートにめあてを書き始めました。

机間指導をし、めあてを書き終わったことを確認すると、
「正多角形は、対称な図形なのか調べよう。いきます。さん、はい。」



「正多角形は、対称な図形なのか調べよう。」

6年生の教室のワンシーンです。めあてをしっかりと確認することで、子どもたちは、この時間に何を学習するのか意識することができていました。「ノートに書く」ということもそうですが、「みんなで声をそろえて出す」ということが特に大切だと感じました。

みんなでそろえて声を出すことで、①学習することを意識することができる②みんなで気持ちをそろえて学習に向かうことができるという二つの利点があります。授業は教師がつくるものですが、教師だけががんばれば授業が成立するというものでもありません。子どもの学習しようという意気込みも必要です。一人一人が声を出し、みんなでそろえることで、学習に対する姿勢を整えることができます。声の大きさやそろい方を聞けば、子どもたちのその日の意気込みがわかるかもしれませんね。

「一人一人がしっかりと声を出せるか」ということは、学級をつくっていく上で気にかけていかなければならないことのひとつだと考えています。

「一人一人がしっかりと声を出せる」ということは、学級が安心できる場所であり、活力のある集団であるということを表しているからです。特に高学年では、声が小さくなる傾向があるので、意識して声を出す機会を取っていくことが大切です。

脳の働きをちょっと紹介します。脳はとても快、不快に敏感です。「声を出す」ということをしなければ、それに関する脳機能は低下していきます。そうになると「声を出す」ということを脳がますます不快に感じるようになります。不快に感じれば、その機能を使う機会を避け、更に、不快に感じるようになるという脳の仕組みがあるそうです。

こう考えていくと、日直の朝の司会や、授業中での音読など、声を意識して出すということの大切さを再認識できますね。

（参考文献：築山節『脳から変えるダメな自分』NHK出版）



漢字の空書きは何のために？

授業を構築するとき、学力向上以外にも気をつけていかなければならないことがたくさんあります。

- ▶ 漢字の指導をどのように行っておられるでしょうか。様々な方法があると思いますが、今回は、漢字の指導のときに行う「空書き」について取り上げたいと思います。

漢字の学習をするときの方法の一つとして、『空書き』があります。「空中で、書き順を意識して書く」というものです。6年生の授業では、この『空書き』が行われていました。丁寧に指導され、子どもたちも、先生と一緒に書き順を意識しながら学習を進めていました。

ところで、空書きは何のために行うのでしょうか。まず、思い浮かぶのは、上にも挙げたように「先生と同じように空書きすることで、書き順を覚える」ということです。そして、「繰り返して行うことで、定着を図る」「手本を見ないで、覚えているかを確認する」などの基礎基本の定着のためということではないのでしょうか。

このように、学力面での効果はたくさん挙げられます。でも、6年生にもなれば、一斉に指導しなくても、漢字ドリルを見ながら書き順を覚え、自分で漢字の練習をするぐらいの力は十分にもっています。個に合わせた学習という意味では、漢字ドリルのやり方を教わり、自分のペースで進めていくほうが理に適っていて効率的です。しかし、6年生の学習の様子を見てみると、それでも「先生と一緒にみんなで空書きをする」ということに意味があるのではないかということを感じさせられました。

そこで、ちょっと違う視点から『空書き』について考えてみたいと思います。

集団の中で行動しようと思えば、同じように行動することを求められる場面が多く出てきます。本意でなくても、みんなと行動をともにしなければなりません。みんなが空書きを行うということは、『あまりやりたくないなあ』と思っても、みんなが手を挙げ、空書きを始めれば、やらなければならない。あるいは、「みんながやるから無意識のうちに空書きを始めている」という状況が作り出されることとなります。

このような状況の中で、みんなと同じ活動をするというルールに従って行動することで、子どもたちは、「やりたいことがあっても、それを抑えなければならない場面がある」ということを無意識のうちに体験的に学んでいきます。繰り返すことで、自然と自己を規制する力を高めていくことができると思います。『みんなで空書きをする』といった活動をしっかりできる子どもを育てることが、「きまりを守ろう」「協調していこう」というような規範意識を育てることにつながっていくのではないのでしょうか。

授業を構築する際、「学力を向上」を図ることは当然のことですが、それに加えて、「学級経営（特に集団づくり）」という視点も忘れてはならないと思います。学級がうまく機能して、その上に「学力の向上」があるからです。学級経営（特に集団づくり）をする時間というと、教科の授業以外を思い浮かべがちですが、学校生活の中で一番多くの時間を占めるのは、授業の時間です。だからこそ、授業の時間に「学級経営（特に集団づくり）」という視点をもたなければならない、ということを強く印象付けられた学習の一場面でした。



子どもが集中するときって どのようなとき？

教師って、子どもが集中して学習に取り組めるように、いろいろなことを考え、配慮しているのですね。

▶ 「子どもたちが集中して『ひとり学び』するためには」ということがテーマです。

国語の時間です。ごんぎつねの最後の場面を学習していました。前時の学習を振り返ってから、めあてを提示し、今日の学習の場面を「ひとり読み」しました。

先生が「兵十の気持ちが表れている言葉を見つけて、自分の意見を書きます。兵十の気持ちになって考えてください。」とだけ説明すると、子どもたちは自分たちで読み始め、言葉に線を引き、そこからわかる気持ちを書き始めました。比較的長い時間だったのですが、先生に注意を受けることなく、最後まで集中して取り組む姿が見られました。

この子どもたちの様子から、集中して取り組んでいるのはなぜかという要因を考えてみると、次の4点があったのではないかと思います。



①学習の見通しをもち、学習の目的がわかっている

→気持ちを読み取り、音読に生かすという学習のゴールが示されることで、学習の見通しと目的を理解できていた。

②やることが明確である

→最後の場面であったので、それまでの取組の積み重ねより、子どもたちが何をやればよいのかということがよくわかっていた。

③ひとり学びのときのルールが共有されている

→自分のやることが終わっても、静かに待ち、更に付け足すことはないか考えていた。

④机間指導が適切に行われている

→つまずきのある子どもを素早くフォローすることで、子どもたちは学習に対して安心感をもつことができていた。

→よく考えて書いているところに丸をつけたり、線を引いたりすることで、子どもたちの意欲が高まっていた。

→先生が見てまわることで、子どもたちに程よい緊張感があつた。



子どもたちは、学習の中で「何のためにするのか」「どのようにするのか」ということがわかり、安心して学習に取り組むことができていたようです。また、程よい緊張感をもつことで、意欲を持続し、集中して取り組んでいたのではないかと思います。

この授業を通して、子どもを支援していくために机間指導は欠かせないものだ改めて実感しました。そこで、先輩の先生から教えてもらった、適切に机間指導するコツを紹介します。

①全員に指示が通っているか確認する。

②つまずいている子どもはいないか見てまわり、ヒントを与える。

③ヒントをもらってもわかりにくい子どもにはじっくり関わる。

このような流れで机間指導をすると、全員を支援していくことができると教えていただきました。



「隣同士で話し合ってみよう。」

学力向上の面，社会性の育成の面，双方からの学びを考えてみる必要があります。

▶ グループ学習の効用ってどのようなものがあるのでしょうか。

道徳の時間です。いつもの読み物資料を使った授業とは違い、挿絵だけで授業が展開されていきます。子どもたちは、次々出てくる挿絵に関心を示し、気付いたことや思ったことをつぶやいたり、挙手して発表したりしながら、学習をしていました。学習の中で、何度か「隣同士で話し合ってみよう」と、ペアトークの時間が設けられていました。隣同士で、子どもたちが生き生きと話し合う様子を見て「いい姿だな」と思いながら見ていたのですが、そもそも、このペアトークは何のために授業に取り入れるのでしょうか。

ペアトークを取り入れ、交流することは、「子どもの主体的な学びをつくる」「子どもの考えを広げる、深める」「発表する機会を増やす」「少人数にすることで発表することに対する抵抗を少なくする」など、様々な意味があると思います。では、人間関係の形成という視点からみるとどうでしょうか。

ある研究の中で、学級の人間関係をよりよくしていくための方法として、「班」(ペアなどのグループを含む)の導入が効果的であると述べられています。班活動の割合が、全体の20%程度で、孤立する児童が大幅に減少するそうです。ただ、多く取り入れたらよいというわけではなく、効果は図のように20%を超えるとき

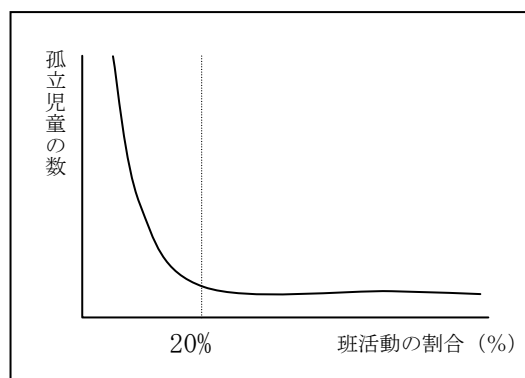


図 班活動の割合と孤立児童の数

ほど変わりはないようです。(参考論文 鳥海, 石井「学級集団形成における教師による介入の効果」)あくまでも、シュミレーションによる結果ですので、この結果が全てとは言いきれませんが、参考になるとと思います。

学力や社会性など、子どもたちの生きる力を育てていくために、様々な学習形態を取り入れていくことが大切ですね。



グループでの話し合いなど、子どもたちが交流する時間は大切なものとわかってはいるものの、なかなか授業の中で時間をとることが難しいこともあるのではないのでしょうか。

グループでの話し合いの時間をとると、どうしても時間がかかってしまい、授業で教えなければならない内容が押さえきれないということがあります。また、グループでの話し合いで学習を深めていくためには、一斉指導で学習を深めていくよりも難しい面があります。更に、教師が周到な準備をすることや、子どもたちがその学習方法になれるまで繰り返して行う必要があります。難しい面ばかり見ていくと、二の足を踏んでしまいそうになります。でも、グループでの活動には様々な効果があり、子どもたちの大きな課題である人間関係をつくっていく力を育てていくという一面だけをとってみても、ペアトークやグループでの話し合いなどは、大切な活動だと改めて感じました。この授業での子どもたちのように、生き生きと話し合えるグループ活動をつくっていければと思います。

明るい運動場は 子どもの心を明るくする！

いつも何気なく目にしているものだけに、
気を使っていきたいですね。知らず知らずのう
ちに大きな影響を与えているかもしれません。

▶ちょっとしたことだけど、大切なこと。学校や教室の環境を整えることもその一つです。ちりも積もれば山となります。

久しぶりに以前勤務していた小学校を訪問しました。
 そのとき、運動場を見て、
 「あれ？何か違うな？」
 と感じました。
 「あっ、運動場の壁に色が塗られている。」



そうです。運動場の壁に色が塗られていて、以前とはだいぶ印象が違いました。格段に運動場が明るくなっています。運動場が明るくなったことは、子どもの心にも大きな影響を与えていると思います。暗い感じのところであれば、なんとなく暗い気持ちになっていくし、明るいところであれば、きっと気持ちも明るくなっていくのではないのでしょうか。

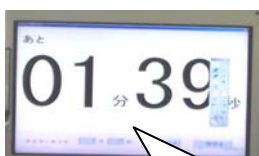
これは、ヨーロッパの犯罪学の話です。犯罪を減らすために、初めは「どうしたら犯罪が減るのか」と人の心に焦点を当てて対策を考えていました。でも、なかなか犯罪は減りませんでした。そこで、視点を変え、環境に目を向け、犯罪がよく起きる場所を見通しがよく、明るい環境につくり変えたそうです。そうすると、何と、犯罪が半減。環境を整えるって大事ですね。

この小学校の子どもたちが穏やかなのは、運動場の壁をはじめ、いつも整備されている環境が大きく影響しているのではないのでしょうか。

教室において、子どもたちに影響を与える最大の環境と言え、教師です。子どもたちは、教師の言葉遣い、行動、服装、教師机など、いろいろなところを見ています。そのことをしっかり自覚して行動しないとイケないですね。ちなみに私は、「先生、いつも片付けろって言うけど、先生の机、全然片付いてないね。」と言われていました。

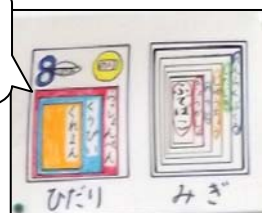


子どもの成長を支える教室環境あれこれ



時間を守って活動しよう。

机の中はこのように整頓しよう。



その場にあった声の大きさで。

声のボリューム



いつも片付いているって
すっきりしますね。

すっきりと片付けば、気持ちもすっきりし
ます。落ち着いた環境をつくるために、まず、
整理整頓から始めましょう。

▶ ある学校で見つけた整理整頓のちょっとした工夫を紹介します。

いつもきれいに整備され、学習で使う道具が整理整頓されていると、すっきりとして学校が明るい印象を受けます。このような環境を保つには、日頃から、壊れたものはすぐに直したり、使ったものをすぐに元通りにしたりするようにしていくことが大切です。

これは、教職員の努力はもちろんありますが、子どもたちにも、しっかりと片付けるという習慣をつけていかなければ、なかなかいつも片付いた環境にはならないと思います。子どもたちが片付けやすくなるためのちょっとした工夫を見つけてきました。

体育の用具入れロッカー

何をどこにしまったらよいのか、写真やカードを使って示してあるので、とてもわかりやすいです。

かごや箱に入れてあるので、そのまま持ち出していくことができます。子どもや先生が運ぶのにも、ばらばらせず便利です。



ちょっとした工夫ですが、この一手間が子どもの成長を助けるのだと思います。ちなみに下の写真は、職員室内の棚です。やっぱりすっきり片付いていますね。お見事！！



一つのケースに一つのものを入れて、置く場所が決められています。そうすることで、返せていなかったらすぐにわかります。

音楽室の楽器入れロッカー

「何を」「どのように」といったことをわかりやすく提示することは、総合育成支援教育の観点からも大切なことですね



われ窓理論 環境犯罪学の理論です。参考までに…。

治安が悪化するまでには、次のような経過をたどるとされています。

- ① 一見無害な秩序違反行為が野放しにされる。(例：建物の1枚の窓ガラスを割られたまま放置しておく。)
- ② 「誰も秩序維持に関心を払っていない」というサインになる。
- ③ それによって、割られる窓ガラスが増え、建物全体が荒廃し、重大な犯罪が起こり易い環境を作り出す。
- ④ 軽犯罪が起きるようになる。
- ⑤ 住民の「体感治安」が低下し、治安維持に協力しなくなる。さらに環境を悪化させる。
- ⑥ 凶悪犯罪等が多発するようになる。(引用文献：文部科学省「児童生徒の規範意識を育むために」)

早いうちに環境を元通りにすることって、本当に大切なことですね。

「きちんと整理整頓しなさい。」
と言うけれども…

片付けがしっかりできる子どもに育てたいと
いう思いから、「きちんと整理整頓しなさい！」
と怒ってしまうこと、よくありませんか…。

▶ 今回のテーマは、「片付け」。大人でも苦手な人って結構いますね。

中間休みに1年生の教室を見にいくと、図1のように、算数の学習の準備ができていて、机の上がきれいに整理整頓されていました。ほかの子どもの机はどうだろうと教室を見渡してみると、やはりきっちり準備ができています。よく見ると、整理の仕方がみんな同じです。教科書、ノート、下敷きの上に筆箱と数図ブロック、更にはおはじきが乗っています。そして、そのセットが図2のように机の左端に置かれていました。



図1

「休み時間は早く遊びに行きたいのに、ちゃんと整理整頓できているなんてすばらしいな」と感心していると、壁に貼られた掲示物が目に入りました。それは、図3のお道具箱の整理の仕方を示したものでした。これを見て、「なるほど、やっぱり子どもたちがきちんと整理整頓できるように、丁寧に指導されているのだな」と感じました。



図2

「きちんと整理整頓しなさい。」とよく言いますが、子どもたちは「きちんと」の意味がよくわかっていないことがあります。どのようにすることが「きちんと」することなのか、図3のように具体的に示し、粘り強く指導、支援していくことで子どもたちは整理整頓の仕方を学んでいくのだと思います。初めはこれでもかというぐらい丁寧に教えていくことが大切です。



図3

片付けられる子に育てるために…

①片付けるタイミングを教える

→ぎりぎりまで遊んでいたり活動していたりすれば片付ける時間が取れない。

②多くのものを出さないようにする

→たくさんの物であふれると、どう片付けてよいかわからなくなる。

③自分で持ち物の管理をする

→自分で持ち物を把握していないと、落とし物にも気付かない。

④片付けるとすっきりすることを教える

→きれいに整頓されることで、自分も周りのみんなもよい気持ちになる。 など

「片付ける」ということの中には、子どもたちが自立していくための要素がいっぱい詰まっています。片付けができると、身のまわりのことが自分でできるようになる。片付けの時間を考えないといけなから、時間の管理ができるようになる。人に迷惑をかけないように片付けることで、思いやりの心が育つ。この他にもいろいろ挙げることができると思います。定着するには時間がかかりますが、「片付け」って大切です。

(参考：多湖輝『片づけられる子』に育てよう』新講社)



職員室から子どもたちを

眺める謎の姿

子どもたちがわかるように支援したり，できるように励ましたり，子どもとの関わり方は様々。信じて待つということも子どもとの関わり方の一つです。

▶ ある先生の謎の姿を追ってみました。その謎の行動の意図とは，一体何なのでしょう。

職員室で、参観させていただいた授業の記録をまとめていた時のことです。

職員室から、運動場にいる子どもたちの様子をうかがう先生がおられました。次の時間は体育だったので、チャイムが鳴ったので、運動場に出て行かれるかなと思って見ていると、まだ、動く様子はありません。しばらくしてから

「よしっ！」

と嬉しそうな笑みを浮かべながら運動場に出て行かれました。



子どもたちが整列している前に行くと、開口一番、
「君たち、すごいな。やっぱり素晴らしい。この間、先生が『体育が始まるまでに用意しておこうな』って言ってたことすっかり覚えていたんやね。今日は、見てみ。自分たちで用意できたやん。先生が言わなくても、考えて行動できたね。みんな、どんどん良くなっているし、これからもっと良くなっていくよ。この調子でやっぺいこう。」

ほめられている子どもたちも嬉しそうでしたが、ほめている先生が一番嬉しそうな様子でした。



子どもたちは、自分たちが頑張ったことをほめられ、嬉しかったことでしょう。そして、「自分たちのがんばりを認めてくれる」「そのがんばりを自分のことのように喜んでくれる」そんな先生の様子を見て、次もがんばろうという気持ちを、子どもたちはもつことができたのではないのでしょうか。

チャイムが鳴った時点では、体育の準備は完了していませんでした。でも、子どもたちが動き出している様子を見て、先生は、「もう少し待てばこの子たちはできる」と、期待して待つという行動を選択されました。

「時間までに準備をする」ということも大切です。指導していかねばならないことであると思います。ですが、今、この学級に必要なことは、「自分たちで行動をする」ということだったのだと思います。時間については、この先、子どもたちに考えさせていかれることでしょう。それは、「これからもっと良くなっていくよ。」という先生言葉にも表れています。

職員室から子どもを眺める謎の姿は、子どもたちのことを信じ、「期待して待つ」という先生の姿でした。



「同じでもいいですよ。」

この言葉に何度救われたことか。後になればなるほど、発表ってしにくくなるんですよね。

▶子どもは必要以上に、「前に発表した人より、よい意見を言わないといけない」と思っています。

算数の時間です。何人かの子どもが先生の質問に対して挙手をしました。一人の子どもが発言し終わった後に、先生がもう一人答えてもらおうと教室を見渡しましたが、手を挙げる子はいませんでした。そこで、先生は意図的に、先ほど手を挙げていた子どもを指名しました。

T：では、〇〇さん、どうですか。

C：やっぱり・・・(発表しづらい様子)。

T：同じでもいいですよ。

C：(すっと立ち上がり) 4 cm^2 の面積の正方形が6つ並んでいるから、 4×6 で 24 cm^2 です。



指名された子どもは、前の発言と同じになると思ったのか、「やっぱり…」と発言しにくそうな様子を見せていました。そのときに、先生が「同じでもいいですよ。」と一言伝えることで、すっと立ち上がり、自信をもって発表することができました。

子どもたちの心の中には、「同じではいけない」「前の人よりもよい意見を言わなくてはいけない」という思いがあるようです。このような思いが、発言しにくい雰囲気をつくる教室をつくってしまうことがあります。発言しにくい雰囲気をつくらないためにも「同じでもいい」という意識を子どもにもたせることが大切だと思います。

同じことでも、何回も聞くことで子どもの理解の助けになることがあります。また、子どもが同じだと思っても、ちょっとした違いがあり、そこを取り上げることで考えを深めていくことができることもあります。

そして、「同じでもいい」の最大のメリットは、友だちの発言に対して共感的な発言を増やしていくことができるということです。「〇〇くんと同じで～です。」と言ってもらえると、発言した子どもは安心した気持ちやうれしい気持ちになるのではないのでしょうか。



ちょっと不安だったけど、同じ意見の人がいて良かった。

授業中に時間がなかつたり、考えを深めていきたいと思っていたりするときに、すぐに違う意見を求めがちになります。以前、担任していた子どもに「もっと発表したらいいのに、ちゃんと考えをもっているんだから。」と言うと、「だって先生、前の人より、よい意見言わなあかんやろ。だから言いにくいねん。」と返ってきました。私が授業の中で、よりよい意見ばかり求めていたのでしょう。その結果、競い合うような発言をする雰囲気をつくってしまい、発表をしにくくしてしまっていたようです。時間がないときなど焦ってしまうこともありますが、「同じでもいいよ。」と落ち着いて、子どもの発言を受けとめることが大切だと思いました。



「まず、そこから来ましたか。」

子どもからちょっとぐらい予想外の答えが返ってきたって大丈夫。笑顔でどーんと受けとめてあげてください。

▶今回は、「温かく見守る」という支援について考えてみました。

国語の時間です。スイミーの授業でした。この時間は、スイミーの特徴を読み取り、みんなの前でスイミーの紹介をするという学習でした。初めに、スイミーの特徴について、教科書で読み取ったことを積極的に発表し合いました。そして、みんなが発表したスイミーのいろいろな特徴をまとめ、「スイミー紹介カード」をつくり、それを使いながら、教室の前でスイミーの紹介をしていきました。スイミーについて上手に紹介していく子どもたちの様子を見て、先生は、

「次は、紹介カードを使わずに紹介できるかな。」

と投げかけました。挿絵だけを見て紹介するのは難しかったようで、自分から発表しようとする前にでてくるものの、言葉に詰まって紹介することができません。「間違っただろう」「全部完璧に言わないといけない」という思いが子どもの中にあるようです。先生は、子どもがなんとか発表しようとする姿を黙って見守っていました。「交代してください。」と発表者が変わっていく中で、ようやく一人の子どもが話し始めました。

「真ん中にいるのがスイミーです。これでいいですか。」

言えたのは、挿絵を指さしながらこのたった一言でした。

でも、それを聞いた先生は、

「まず、そこから来ましたか。さあ、他の人もどんどん続いていきましょう。」

と笑顔で応えられました。この言葉で「間違っただろう」「全部完璧に言わないといけない」という思いが振り払われたのか、次の発表者から二言、三言と増えていきました。聞いている子どもたちからは「がんばれ。」という応援の声が聞こえてきました。そして、最後には、

「真ん中にいるのがスイミーです。広い海にすんでいます。体は小さくて、赤い魚の兄弟たちと楽しく暮らしています。泳ぐのはだれよりも速くて、体はカラス貝よりも真っ黒です。」

と自分の言葉で発表できるようになりました。

紹介カードなしで、一生懸命話そうとしている子どもたちに対して、簡単に「紹介カードを見てもいいよ。」と言ったり、何とか言えた一言に対して「もうちょっと付け加えてみて。」というような言葉をかけたりしていたらどうなっていたでしょうか。失敗することを恐れず発表しようとする姿や、その姿を見て励ます姿を見ることはできなかつたと思います。子どもたちは、先生に温かく見守られ、受けとめてもらうことで、一段上のステップに上がることができていました。

担任の先生の姿を見ていると、東京大学の畑村洋太郎教授の著書『失敗学のすすめ』の中の言葉を思い出しました。

「人の営みを暖かく見る見方だけが新しいものを生み、人間の文化を豊かにする」

子どもたちがよりよい学級の文化をつくり、自分たちの生活を豊かにしていけるように、子どものがんばりを温かく見守っていきたいですね。

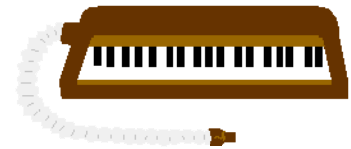
(参考文献：畑村洋太郎『失敗学のすすめ』講談社文庫)



「先生の真似をしてね。」

同じことを指導しても，そのときの状況によって，子どもたちへの届き方は違います。子どもの心に届くときかどうか，見極めたいですね。

▶ 音楽の時間での出来事です。音楽の時間に楽器を持つと音を鳴らしたくなりますよね。



音楽の時間。子どもたちは、楽器を使うのが大好きです。

「カスタネットを用意しましょう。」

と先生が言うと、子どもたちは大喜び。カスタネットを準備すれば、鳴らしてみたいという思いに駆られるのは自然な流れです。カチャカチャカチャ…、カスタネットの音が響きます。

「では、先生が叩くので、真似してください。音読のときみたいに代りばんこね。」

でも、まだ、カスタネットが気になって仕方ない子どもがいます。

「先生の真似をしてくださいって言っているのに、真似できていない人がいるね。真似をしてね。」

カスタネットを叩く準備の姿勢を見せながら、先生が優しく声をかけます。でも、また、カスタネットの音がします。先生はニコリとして、カスタネットを叩く方の手で、頭を掻きながら、

「先生の真似してや。先生の真似してや。真似してや。真似するんやで。」

子どもたちを見渡し、少しずつ声を大きくしていきました。先生は業を煮やしたのでしょうか。いえ、そうではありませんでした。笑いながら先生が頭を掻いているのを見て、子どもたちも真似をして、カスタネットを叩いていた手で頭を掻き始めました。子どもたちは次第に、先生が「何を言おうとしているのか」に気付き、笑顔になっていきます。更に先生は、目をこする真似をしながら、子どもたちに笑いながら話しかけました。

「先生の真似してや。先生何してる？目をこすってるよ。」

みんなが先生に注目し、楽しそうに目をこする姿がありました。もう、音楽室にはカスタネットの音は聞こえません。

「みんなできた。素晴らしい。」

「じゃあ、いきます。」

先生の掛け声とともに、きれいにそろったカスタネットの音が、音楽室に響きました。

この後、カスタネットの練習をして、子どもたちが満足したときに、先生は、音楽での約束について話されていました。

「楽器を使うとき、これから鍵盤ハーモニカとかもみんな使うんだよね。そのときに、勝手にブーブーとかピーピーとか鳴らしたら、勉強できないよね。音楽ではそれ（勝手に鳴らさないこと）が一番大事な約束です。」

「鳴らさない方法を考えて。グーで（カスタネットを）握っておくとならないよね。」

一通りカスタネットを使って、子どもたちの気持ちが落ち着いたときに、「音楽の時間の大切な約束」「鳴らさない方法」について、子どもたちにわかるように話されている姿が印象的でした。



「先生，うれしい。」

「うれしい。」「ありがとう。」「おかげで助かったよ。」自分の感じたことをそのまま伝える。そんな語りかけが子どもを勇気付けます。

▶今回は，子どもに寄り添う教師の「語りかけ」がテーマです。

「学校でうまくやっていけるだろうか。新しい友だちができるだろうか。」

転校生は、大きな不安を抱いて新しい学校にやってきます。

この学級にも転校生がやってきました。きっと不安で、「学校に行くの、明日からにしたい」なんて気持ちもあったのではないのでしょうか。でも、学級の子どもたちが声をかけてくれたり、一緒に遊んだりしながら1日を過ごすことで、不安な気持ちは、少しずつ和らいでいったようです。

次の日、転校生は初めて、手を挙げて発表をしました。恥ずかしさからでしょうか、今にも消え入りそうな声でした。

そんな子どもに、先生は優しく声をかけました。

「先生、うれしい。昨日初めてこの学校に転校してきて、先生ずっと〇〇さんを応援していました。今日、自分から手を挙げて発表ができましたね。それは昨日、みんなと一緒にたくさん遊んでくれたからです。だから、安心して学びださばったんやな。ありがとう。」



この言葉をかけられた子どもは嬉しかったに違いありません。転校してきて、まだ学級の子どもたちの顔と名前も一致しない状況で、手を挙げて発表することはかなりの勇気がいることです。その思いを先生が汲み取り、語りかけました。その言葉に表情こそ変わりませんでした。きっと勇気付けられたはず。その証拠に、この子どもはその後2回発表することができました。しかも、その発表は1回目より堂々として大きな声でした。

そして、周りの子どもたちも誇らしかったことでしょう。一緒に遊んだことが、この発表につながったのですから。子どもたちは、当たり前のように行ったことなかもかもしれませんが、転校生にとっては、大きな大きな助けになったことだと思います。そのことに、先生のこの言葉かけがなければ、子どもたちは気が付かなかったかもしれません。

子どもの不安を汲み取り、その思いに寄り添うと同時に、周りの子どもたちが取った行動がどれだけ素晴らしいことであったかを意味付ける、先生の温かい語りかけでした。

学級の中には、転校生だけでなく、不安を抱えながらも一生懸命学校に来ている子どもたちがいます。そんな子どもたちの心に寄り添い、励まし、勇気付けられる言葉をもちたいものです。そして、先生だけではなく、周りの子どもたちがそんな言葉をかけられるような学級になったら、教師として、この上なく嬉しいことです。

私も転校生でしたが、転校初日に友だちがかけてくれた「一緒に遊ぼう。」という一言は、今でも鮮明に覚えています。



「どう間違っただかっていうのが
勉強なんだよ。」

「やっぱり、間違ったら恥ずかしい。」

子どもたちの正直な思いです。でも、間違いの中に次へのステップが隠れています。

▶ 子どもの間違いに対して、どのような対応をしていくことが大切なのでしょうか。

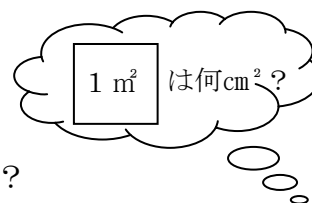
算数の時間に、練習問題の答え合わせをしていました。面積の学習で、単位変換をする問題でした。 m^2 (平方メートル) を cm^2 (平方センチメートル) に変換する問題で、子どもが間違ってしまったときの様子です。

T : はい、どうぞ。1 平方メートルは？

C : 1 m^2 は、 100 cm^2 。

T : 惜しい。1 m^2 は、1 辺が、〇〇さん何メートルやった？

C : (間違えたことが恥ずかしかったのか黙ってしまう様子)



T : じゃあ、思い出しましょう。1 平方メートル、一つの辺何メートルやった？1 平方メートルやから、(図を指差しながら) これ、何メートル？

C : (答えず)

T : (しばらく待つ)

C : 100 cm。

T : そうそう、ここは 1 m やから、センチで言ったら 100 cm のことですね。だから〇〇さん、ここまで合ってたから…。

C : (少しすねた態度、話がしっかり聞けない状態になっている)

T : (子どもの様子を見守りながら) しっかり聞いてな。ここで、1 m は 100 cm やから、 100 cm^2 って書いちゃったんやな。ここから続きがあって、今から説明を聞いたらわかるからね。

みんな間違えることがあるから、どう間違っただかっていうことを考えるのが勉強なんだよ。

T : 〇〇さん、どっちも (たても横も) 100 cm ですね。だから、1 辺 \times 1 辺、 100×100 をします。じゃあ、 100×100 をしたら…。0 いくつ、つくかな。

C : 10000 cm^2 。

T : ちゃんと $1 \text{ m} = 100 \text{ cm}$ ってわかってたから、(忘れずに) かけてくださいね。 100×100 。

これ間違っていた人、たくさんいるよ。この間のプリントでも 100 って書いていた人が多かったです。気をつけようね。

「間違い」を素直に受けとめることはなかなか難しいものです。「間違い」を受けとめていくためには、今回のように、結果ではなく、どこで間違えたのかを考えることが大切だと感じました。そして、その「間違い」が、みんなにとっても、大事な学習になるということを、子どもたちに意識させることが大切だと思いました。

この授業の先生の対応を見ていると、「教室はまちがうところだ」という絵本を思い出しました。間違っても大丈夫という学級の雰囲気って、いいですよ。



ほめる言葉を豊富にもつ

ほめることは子どもに意欲を与えます。ほめることは子どもに力を与えます。ほめることは子どもに勇気を与えます。そして、ほめたものに、温かい気持ちを残します。

▶今回は、「ほめる」ということに注目してみました。

この学級を参観させていただいたときの第一印象は、「メリハリがあり、秩序が保たれている」ということでした。授業を見ていると特に厳しく指導をされているわけはありませんが、学習規律が確立され、意欲的に子どもが学習しています。その理由は何なのだろうと授業を見ていると、「ほめる」言葉の多さに気付きました。

そこで、1時間の授業の中で、どのようなほめ方がされているか集めてみました。

- ・しっかりと返事ができたとき

「いい返事です。」

「今日は成功しそう。やる気を感じたよ。」

- ・わからないことを聞くことができたとき

「そう、よく自分で尋ねることができましたね。」

- ・しっかりと聞く姿勢が取れたとき

「座った瞬間、すばらしい姿勢の人。さすが、やる気のある1日を過ごすことができそうですね。」

「すぐに見てくれたね。すごい。」

「君の聞き方、先生もやる気が出てきます。」

- ・発表ができたとき

「パンっ！（手を叩く）でたっ！（その意見待っていました。）」

「だんだんよい答えを考えることができてきましたね。」

「なるほどね。（ゆっくりとうなずきながら）」



この他にもたくさんのほめ言葉がありました。上記に書かれたものを見るだけでも、様々な言葉を使って子どもたちをほめていることがわかります。「すごいね。」「よくできましたね。」と子どもがしたことを直接評価するだけでなく、「先生やる気が出てきます。」「パンっ！でたっ！」と先生が喜びを伝えることで子どもの行動や考えを評価しています。このように子どもを評価する豊富な言葉を持ちたいですね。「子どものちょっとした行動を見逃さず、がんばる姿が見られたらほめる」ことが、学級に学習規律を保つ一因になると感じました。

子どもたちが困難を感じたとき、ほめてもらったり認めてもらったりすることで乗り越えていくことができます。

新しい学習をするとき、脳は大量の酸素が消費し、酸欠状態になり、大きなストレスを感じます。このストレスに耐えられなくなったとき、学習をやめてしまうのですが、このストレスが脳を鍛えるためには必要なのだそうです。だからこのストレスに耐え、克服する力を付けていく必要があります。そのためには、「教師の声かけが必要であり、過程をほめて、できたときは認めていくという姿勢が効果的である」と脳科学の分野からも、ほめることの効用が指摘されていました。

（参考文献：『先生の毎日を応援する教育マガジン [ひと・ゆめ]』ぶんけい）



発表しやすい雰囲気をつくるために —教師の受けとめ方—

「温かく受けとめてもらえた」「認めてもらえた」という思いを，子どもたちがもってくれたらうれしいですね。

▶意欲的に発言できる学級の雰囲気をつくるために，教師はどのような姿勢で臨めばいいのでしょうか。

道徳の時間です。1時間の授業の中で、子どもたちは積極的に挙手をして、自分の思いや考えたことを発表していきます。子どもたちの意見が途切れることなく、授業が進んでいきます。授業の中で、子どもたちの発言に対して、担任の先生が子どもたちの発言を温かく受けとめている姿が印象に残りました。このような教師の姿勢が「発表しやすい雰囲気」をつくっていくと感じました。

(担任の先生が行っていた温かい受けとめ方)

① うなずき

子どもの発言に対して、笑顔でうなずきながら聞く。



② あいづちを打つ

「なるほど。(嬉しそうに)」「あー、そうか。(しみじみと)」

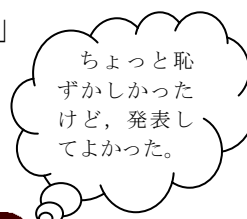
③ 共感

「そうやなあ。(納得したように)」

④ 繰り返し

C「順番待っておけばよかったな。(後悔)」

T「待っておけばよかったね。(後悔したような表情で)」



⑤ 指名されなかった子どもへの対応

「(手を挙げている人にお手をおろすしぐさをして)手を挙げた人がしっかり考えられていることが伝わってきました。」

上記のように、1時間の授業の中で、いろいろな受けとめ方をされていました。子どもたちは、みんなに向けて発言しているとはいえ、やっぱり前に立つ先生がどのような反応をするのか、とても気になるだろうと思います。先生が無表情で聞いていれば、子どもは「(発言が)だめなのかな」と思い、反対に笑顔で聞いていれば、「発言してよかったな」と思うのではないのでしょうか。

1時間だけ受けとめ方を意識しても、さほど子どもの様子は変わらないと思います。でも、毎日だとどうでしょう。きっと大きな違いが出てくるはずです。いつも意識して、温かい受けとめ方をしていれば、きっと子どもの様子も変わっていくのではないのでしょうか。

「子どもの発言を温かく受けとめる」ことは、だれもが大切だと共感することだと思います。でも、いつもできているかという疑問符がつきます。

以前、録画した授業のビデオを見て、自分では、笑顔で受けとめていたつもりが、実際には非常に硬い表情をしていることに気付いたことがあります。時折、自分のしぐさや表情、動作をチェックすることも大事ですね。



「名前は大切なんだよ。」

見通しをもつって、行事予定表を確かめる
だけじゃないんですね。

▶見通しをもつために、年間計画を立てたり、単元構想を考えたりします。しかし、それだけでは不十分です。

1年生の教室に入らせていただいたとき、担任の先生に紹介をしてもらいました。「今日、みんなと一緒に勉強をしてくれる、山口 賢先生です。」
知らない先生の登場に子どもたちは興味津々です。



「山口先生に何か質問はありますか？」
と、担任の先生が子どもたちに尋ねたところ、元気のよい返事がありました。「はい。先生は、山口県から来たのですか？」
名前を紹介してもらったときには、今まで必ずあった質問だったので、「やっぱりそうきたか」という思いと、「1年生なのに都道府県名をよく知っているな」という驚きで、特に何も考えず、子どもの言葉に乗って答えていました。「先生は、山口県から来ました…、と言いたいところですが、残念。違います。西賀茂というところから、バイクに乗ってやってきました。」

子どもの無邪気な冗談に乗ったつもりでしたが、それは間違いでした。2度目に子どもが「山口県♪」と楽しそうに言ったときに、担任の先生は優しく諭すように、おっしゃいました。「1回目はね、冗談に乗ってくれたけど、2回目は駄目だよ。名前は大切なんだよ。名前で遊んじゃいけないよ。」
言った子どもは黙って考えていました。

冗談に乗った者の面目を潰さないようにとの配慮と、子どもたちによりよく成長してほしいという思いの詰まった、“この一言”は、私にとっても考えさせられる一言になりました。

この冗談を「大人に対する軽い冗談だから」と注意することなく、見過ごしていたら、子どもたちはどうなっていくでしょうか。きっと名前を大切にできる子どもたちにはならないでしょう。それどころか先生の名前で遊んでよいのだから、友だちに対しても、相手を傷付けるような名前で呼ぶようなことが出てくるかもしれません。

これを見逃したら、この先どのようなことにつながるかを瞬時に判断し、先を見通した、先生の一言でした。



「先生の言いたいことが 本当にわかるの？」

話は最後まで聞かないといけません。でも、本当に最後まで聞かせるように心がけていますか。

▶ 「最後まで聞く力」をのばす細やかな指導・支援をお伝えします。

算数の時間。算数の練習帳を使って学習していました。そこに出てくる動物の数を数える学習です。

先生 「ペンギンは何匹いるでしょう？」
子ども 「2匹」
先生 「では、ウサギは何羽でしょう？」
子ども 「3羽」



このように、質問を繰り返していくうちに、子どもたちは先生の質問を先読みするようになりました。そこで先生は…

先生 「蛙は、何…」
子どもたち 「はい。」「はい、わかりました。」（次々と手が挙がる。）
先生 「先生の言いたいことが本当にわかるの？まだ、『蛙は何』までしか言っていないよ。」
子どもたち 「はい。」（まだ手を挙げている）
（少し間をとって）



蛙は6匹だ！

先生 「蛙は何色でしょう。」
子どもたち 「あ〜っ」

子どもたちが先読みして手を挙げたときに、先生はその子を指名して授業を進めることもできたと思います。「先生の言いたいことわかったんだ。すごいね。」と。ですが、そのようなことを繰り返していけば、話を最後まで聞かなくてもいいという無言のメッセージを発することにもなります。そこで、機転を利かせて「何色でしょう。」と質問した先生の柔らかい支援、素晴らしいですね。

特に1年生は、「話を聞く」ということを徹底して指導する時期です。「最後まで人の話は聞きます。」と指導するからには、教師自身も「最後まで聞かせる」という姿を見せていく必要があると思います。このような日常の細やかな指導が、子どもの「聞く力」の基礎をつかっていくのだなと勉強させていただきました。



「毎年バージョンアップしていきます。」

子どもの言葉を受けとめ、上手に返してあげることによって、子どもの意欲を高めることができるのですね。

▶ 予想外の子どもの発言にどう対応するか、この「一瞬の対応力」が求められます。

2年生の生活科の時間。1年生を案内して、学校探検に行くための最後の準備の時間でした。子どもたちは1年生を上手に案内して、学校探検を成功させるために真剣に話を聞いています。

先生は、子どもたちに学校探検について一つ一つ尋ねていきます。どこに案内するのか、案内する場所に到着したら何をするのか、どのように説明するのか。子どもたちは、学校探検を思い浮かべながら先生の質問に答えていきます。

行った場所がわかるように、一人一人が持っているカードにシールを貼ることになっていました。そのシールについて話し合っているときでした。

「行った場所に貼るシールをカードに付けておきました。その場所のところにシールを一つ取って貼ってください。1年生にはここに貼るんだよと教えてあげてくださいね。」

先生がこう言った後に、一人の子が質問しました。

「去年はその場所にシールがあって、それで、1年生がそのシールを貼るってなっていたのですが、何で変わったのですか。」

去年とはやり方が違うという素朴な疑問に、先生は子どもの発言を受けとめた上で、

「去年と同じでは…（首を振りながら、手で“ダメ”のポーズ）。

毎年、バージョンアップしていきます。新しいやり方に挑戦していきましょう。」

その言葉に、子どもたちはお互い目を見合わせて、

「おおーっ。バージョンアップやって。よっしゃ。」

教室が「やるぞ」という雰囲気包まれた瞬間でした。



子どもが疑問をもたなければ、何事もなく通り過ぎて行った場面だったと思います。この子どもの発言は、いわば「予想外」の発言だったのではないのでしょうか。先生は、この予想外の発言を取り上げ、一瞬にして子どもの気持ちを高めました。千葉市教育センターが行った研究の中で、教師が身に付けたい授業力の4つの力の一つとして、このような子どもの予想外の発言を取り上げる「一瞬の対応力」が挙げられています。

どうしたら、このような「うまい」と思わず言ってしまうような対応がとれるようになるのか。それは、子どもの発言を予想し、どのような返しができるか、常日頃考え、自分のスタイルをつくっていくことだそうです。日々の継続した取組が大切なのですね。

※4つの力とは、一瞬の対応力、授業コミュニケーション力、意欲向上力、授業構成力です。

（参考文献：千葉市教育センター、千葉大学『達人に学ぶ授業力読本 10年目までに身に付ける授業の4力』）

挙手して発言できる ようにするためには

「はいっ！」と言って、元気に手を挙げてほしい。一度は思ったことがあるのではないのでしょうか。

▶ 明確な意図と正確な見取りと的確な手だて。これぞ、教師の三種の神器です。

「どうしたら子どもたちが挙手して発言ができるようになるのか」ということについて担任の先生と話し合いました。学級の現状を踏まえて、どのようなことができるのか考えていきました。

〈学級の現状〉

挙手に対して、不安感をもっている児童が少なくない。自分の考えを述べて、人と違ったり、間違ったりすることで、どのような反応が返ってくるか心配をしている。4月からの働きかけにより、少しずつではあるが、挙手して発言する児童が増えてきている。



〈話し合いで出てきた手だて〉

- ① 話す機会を増やし、人前で話すことへの抵抗感をなくしていく。
 - ・ ペアトークやグループ学習を多く取り入れる。
 - 小グループで話し合ったことを生かして、全体での交流につなぐ。
 - 全体での交流では、いろいろな児童が発言できるように工夫する。
 - ・ 机間指導を生かした意図的指名をする。
 - 挙手しての発言ではないが、意図的指名により自信をつけさせていく。
- ② 心的な原因を取り除く。
 - ・ チャンピオンシップからの発言ではなく、パートナーシップからの発言を教師もこどもも心がけるようにする。 （詳細は次ページで！）



「挙手」について、担任の先生とお話をさせていただく中で、以前、子どもたちの挙手が少ないことで悩んでいたときのことを思い出しました。先輩の先生にそのことを話すと、「何で手を挙げて発表させる必要があるの？」と問われ、明確に答えることができませんでした。きっと、挙手して発言することの見栄えの良さにしか目がいってなかった、子どものためというよりも、自分自身の授業の評価に目がいていたからでしょう。先輩の先生は、そのことを見透かし、挙手することの意味を考えさせてくれたのでした。形にだけこだわった指導を続けていけば、子どもたちに挙手を強いることになり、「自ら進んで」という意欲を潰してしまっていたかもしれません。

子どもたちに、ある行動をうながすとき、「何のためにするのか」ということを、教師が明確にもっておくことが、子どもの成長につながるのだと思います。

担任の先生に「なぜ、手を挙げて発言しないといけないのですか」と同じ質問をしたところ、「生きていく上で、自分から相手に思いを伝えることは大切なことだと思います。だから、自分の意思で手を挙げて、発表する練習を積むことで、進んで自分の考えを伝えられる人になって欲しいんです。」

と明確に答えてくださいました。

パートナーシップからの発言

先生から「それはパートナーシップからの
発言だね。」なんて言われたら、ちょっとうれ
しくなりそうですね。

▶ 発表しにくい心的な原因を取り除くために、「パートナーシップからの発言」に注目しました。

「挙手して発言する」ために、具体的な話型を示すなど様々な支援をして、子どもたちが発言しやすい環境をつくっておられると思います。

発言しやすい環境をつくっていくためには、話型など、具体的な話し方を示すということももちろんですが、「発言しにくい心的な原因を取り除く」ということが大切であると考えます。子どもたちの心の中には、「間違ったらどうしよう」「発言したことに対して、何か言われなかな」「前の人よりも良い意見を言わなければならない」といった思いがあります。このような思いを「間違っても大丈夫」「発言することでみんなが学び合える」「みんなに受けとめてもらえる」という思いに変えていけるような温かい学級の雰囲気をつくっていくことが大切です。

そのための一つの工夫として「パートナーシップからの発言」というものがあります。

「パートナーシップからの発言」とは、みんなで学び合うためのパートナーとしての発言と言えます。それに対し「チャンピオンシップからの発言」があり、これは、前の意見よりも良い意見を言わなければならないという考えの発言です。

「パートナーシップからの発言」を意識することで、子どもたちの意識を競い合う発言から、認め合う発言に変えていくことができます。「パートナーシップからの発言」が温かい学級の雰囲気をつくり、子どもの意欲的な発言をうながしていきます。

《パートナーシップからの発言の例》

- ・〇〇さんの発言を聞いて、なるほどと思いました。
- ・〇〇さんと発言を聞いて、～というところがいいなと思いました。
- ・〇〇さんの発言を聞いて、～という考えをもちました。
- ・〇〇さんの発言を聞いて、～についても考えてみたいと思いました。
- ・〇〇さんの発言を聞いて、～と考えることの大切さに気付きました。
- ・〇〇さんの発言を聞いて、今まで一度も考えなかったことなので、〇〇さんの発言をもう一度詳しく聞きたいと思いました。
- ・〇〇さんの発言の～というところに共感しました。でも、～という考え方もできると思います。 など

初めのうちは、パートナーシップからの発言の例を掲示し、教師が意図的に「今の発言を聞いてどう思った？」というような返しを子どもたちにしていくことが必要だと思います。また、教師自身の意識も変えていかなければなりません。子どもの発言によって態度が変わったり、「他の意見はありませんか。」という問いかけを多用したりすることは、子どもたちに正しい答えだけを求めることにつながります。教師自身が子どもの発言を受けとめるということを実践し、子どもたちのモデルになることが大切です。



(参考文献：京都市総合教育センターカリキュラム開発支援センター

「京都発！確かな教育実践のために 8 授業力向上に向けて大切にしたい視点」)

子どもの成長を願う

強い思いに満ちた目で

毅然とした対応。それは、言葉に、子どもの成長を願う強い思いを込め、子どもたちに伝えることです。

▶ 「毅然とした指導」について考えてみました。

「子どものよくない行動には、毅然とした指導が必要である」とよく言われます。しかし、この「毅然とした指導」は、大切だとわかっているにもかかわらず、なかなか難しいものです。子どもの様子や状態によって、対応の基準があいまいになってしまったり、逆に、明確な基準を保つために、必要以上にきつい指導になり、頭ごなしに子どもを怒ってしまったりすることがあります。子どもたちの様子やその場の状況、自分自身の心の状態に左右されず、子どもたちに大切なことを伝えていくためにはどうしたらよいのでしょうか。

6年生の授業の様子です。算数の時間に反比例の学習をしていました。反比例について、自信がなかったのか、集中できない子どもがいました。友だちがわかるように説明をしてくれているにもかかわらず、話を聞くことができていなかった子どもに対して先生が指導しました。

C：一方の値と他方の値が決まった…（後略）。

T：〇〇くん、聞いていましたか。

C：聞いていませんでした。（あまり反省のない様子）

T：それは、一生懸命話している相手に対して失礼です。

（強い思いに満ちた目で子どもを見つめる。）

C：……。 （真剣な表情になる）

T：しっかり聞いてくださいね。

C：はい。（聞く姿勢を取る）



子どものあまり反省のない態度に対して、冷静に対応し、強い思いに満ちた目で教師の思いを伝え、子どもに反省をうながしました。その目は、にらみつけるような強さではなく、子どもの成長を願う一生懸命な思いが表れた強さでした。その思いがきくと子どもに伝わったのだと思います。

「毅然とした指導」とは、このような子どもの成長を願う、教師の強い思いの中から出てくるのだと感じさせられる一場面でした。

「魔法の言葉などはない。あるのは、心を込めて伝える言葉。」

これは、フィギュアスケートの浅田真央や村上佳菜子を育てた山田満知子コーチの言葉です。「子どもの成長のためにどのような言葉をかけるのか、一生懸命考え、悩むことが大切。」とインタビューに答えておられました。どのような一流のコーチでも、魔法の言葉はないのですね。子どものために考え、悩み、子どもの成長を願う思いを大切に、子どもたちに関わっていきたいと思いました。



おわりに

たくさんの授業参観をさせていただくことを通して、様々なことを勉強させていただきました。一番強く感じたのは、子どもが一生懸命学習しているときには、必ず教師が「笑顔」であるということです。先生が「笑顔」であるということだけで、子どもたちにたくさんのパワーを与えているのだと思います。そして、子どもたちが楽しい気持ちになれば、先生もまた楽しくなります。

このような好循環をつくり出す「笑顔」の素晴らしさを改めて実感しました。子どもたちの前に、「笑顔」で立ち、子どもたちに元気を与えられる教師になりたいと、先生方の指導される姿から思いました。

最後になりましたが、快く授業を提供してくださった先生方に深くお礼を申し上げますとともに、それぞれの学級の子どもたちのよりよい成長を心から願っています。



参考，引用文献

- 千葉市教育センター，千葉大学『達人に学ぶ授業力読本 10年目までに身に付ける授業の4力』
- 有田和正『すぐれた授業の創り方入門～名人たちの授業に学ぶ～』 教育出版
- 山岸明子『発達をうながす教育心理学』 新曜社
- 築山節『脳から変えるダメな自分』 NHK 出版
- 京都市総合教育センター『京都発！確かな教育実践のために 8 授業力向上に向けて大切にしたい視点』
- 文部科学省「児童生徒の規範意識を育むための教師用指導資料」
- 畑村洋太郎『失敗学のすすめ』講談社文庫
- 多湖輝『「片づけられる子」に育てよう』新講社
- 鳥海不二夫，石井健一郎「学級集団形成における教師による介入の効果」『電磁情報通信学会論文誌』
『先生の毎日を応援する教育マガジン [ひと・ゆめ]』2011. 11 ぶんけい
- 秋田喜代美編『教師の言葉とコミュニケーション』教育開発研究所
- 諸富祥彦『ちょっと先輩が教える “うまくいく” 仕事のコツ』教育開発研究所
- 嶋野道弘『子どもの心を動かす親と教師の “語りかけ”』明治図書
- 今泉博，佐藤隆，山崎隆夫，渡辺克哉編『若い教師のステップアップ 4 学級経営力』旬報社